

サイクリング天国いばらきを走ろう！

－「つくば霞ヶ浦りんりんロード」サイクリングイベント実践報告－

HMBアウトドアクラブ 霞ヶ浦サイクリングチーム 会長 張替 幸一、副会長 古川 ゆかり

キーワード：霞ヶ浦の特性とサイクリングへの活用

抄録

私たちHMBアウトドアクラブは、「サイクリング天国いばらきを走ろう！」をテーマに2004年から、霞ヶ浦の特性を生かしたサイクリングイベントを提供し実践していくことで、茨城県内にとどまらず関東・東北一円から延べ1400人に上る参加者を呼び込んで来た。これは、その発想から実践に至った経緯と今後の目標についての記録である。

1. はじめに

“人はなぜ回りたがるのか”サイクリングを趣味とする人々の共通点として、何かの回りを回ってみたいという発想がある。これは、道を知らなくとも回れるということだけでなく、同じルートを通らずに、より長い距離を走りたいという気持ちや、往復ルートと違って走り出した途端ゴールまでの道のりが縮んでいくという利点、そしてスタート地点が見えゴールした時のこの上ない達成感など様々な動機づけがあるからである。

特に母なる湖ともいえる霞ヶ浦は、スーパーフラットな湖岸道路とは対照的に歩内陸に入ると、まぶしいほどの緑で覆われた森や畑、台地が広がる。

私どもHMBアウトドアクラブは、2004年日本初の船を使ったファミリーサイクリング「霞ヶ浦サイクル&クルーズ」を実施した。その後、この霞ヶ浦の特性を生かした多種多様なサイクリングイベントを計画、実行し、茨城県内だけでなく関東、東北一円から延べ1400名に上る参加者を呼び込んで来た。この湖沼会議の開催を機に、その方法や実施記録をまとめ、今後の事業継続や継承の一助とし、霞ヶ浦や茨城県の魅力度アップに貢献したいと考える。

2. 方法

① <霞ヶ浦サイクル&クルーズ>

土浦港から発着する遊覧船「ホワイトアイリス号」を特別にチャーターし潮来まで自転車といっしょにクルーズ後、潮来から土浦までの約50kmをサイクリング。サポートカーで並走し、途中で、地元の食材を使ったおやつや、特色のある弁当などを提供した。ファミリーの中でも走れる大人には、内陸の小高い丘の上の公園へのヒルクライムや、起伏のある里山をめぐるアト

ラクションを用意し、湖岸を走る子どもや女性に後方から追いつき合流するという工夫をした。

② <くくるつと霞ヶ浦 高浜入り湖岸道路 40km>

行方市玉造にある霞ヶ浦ふれあいランド発着で、高浜入りの湖岸道路約40kmを一周するというファミリーサイクリングである。サイクル&クルーズに比べて乗船料がかからないため、参加費を1000円～1500円という安い料金に設定した。こちら、走れる大人のために湖岸の古墳や里山をめぐるアップダウンを楽しめるアトラクションを用意し子どもらとのバランスに配慮した。

③ <スーパーチャレンジ霞ヶ浦 西浦 130km>

サイクリングビギナーにとって、100km走破というのはロングライドの最初の目標となる距離である。霞ヶ浦1周というと90kmと考えられているが、霞ヶ浦大橋以北の高浜入りを加えることで130kmという距離となる。そこで過去にファミリーサイクリングに参加した家族からより長い距離に挑戦したい成人のビギナーを募り実施した。ビギナーにとっての挑戦という意味でスーパーチャレンジという名称をつけたものである。

④ <霞ヶ浦1周フィットネスサイクリング 90km>

霞ヶ浦を1周するサイクリングは以前から行われていたが、ビギナーに特化したものではなかった。そこでサポートカーで並走し地元の名物をおやつや昼食として提供したり、スタッフが乗り方や走り方をアドバイスしたり、時には湖岸をはなれてアップダウンを走るアトラクションを楽しんだりなど、ビギナーがより楽しめる工夫を随所に盛り込むことで差別化を図った。

3. 結果

① <霞ヶ浦サイクル&クルーズ>

写真 1



第 1 回は広報に大変苦労した。りんりんロードでピラ配りをしたり、掲載無料の情報誌に掲載していただくなどして何とか集まったのは 60 名。約 10 名のサポートスタッフで運営した。しかし 60 名分の自転車を船に積み込むことはできず、やむなく自転車はトラックで潮来まで運ぶこととなった(写真 1)。船の中では東大の助教をしているスタッフが霞ヶ浦の環境などについての話をするなどしながらクルーズを楽しんだ。

特に初回は、全国初の船を使ったファミリーサイクリングということで NHK の取材スタッフが同行し(写真 2)、潮来に下船した際には潮来市役所の有志の方が横断幕を掲げて出迎えてくださるなどした。

写真 2



写真 3



また「潮来ふるさと館」ではトイレ休憩だけでなくザリガニ釣りをしたり(写真 3)、天王崎公園では牛乳普及協会から協賛を受けた牛乳と地元の店のケーキをおやつとして提供したりした。全員が完走し霞ヶ浦総合公園にゴール。完走証とともに、JA 土浦から協賛を受けたレンコンをお土産として配り終了した。翌年の第 2 回からは、特に広報はしなかったが前回の参加者と、そのクチコミを聞いた参加者ですぐに満員御礼となった(写真 4)。計 4 回の参加者の合計は約 330 名に上った。

写真 4



② <くるっと霞ヶ浦 高浜入り湖岸道路 40km>
船のイベントとはちがって参加費も安く人数制限もないことから、広く参加者を募り計 4 回実施した。

写真 5



高浜入りの湖岸を走るコースは、特に筑波山をコースの延長に臨むことのできるすばらしい景観が特長で、晴れた日のサイクリングには非常に適した環境である(写真 5)。合計参加者は約 150 名であった。

③ <スーパーチャレンジ霞ヶ浦 西浦 130km>

初回は 6 月でありながら 8 月並みの気温となり、ビギナーにとっては予想以上に過酷なサイクリング環境となった(写真 6)。しかし 100 km 地点では全員で達成感をかみしめ最後は感動のゴールとなった。その後、ロングライドの魅力に目覚めたビギナーが繰り返し参加するなどしたことから、2 回目以降は、湖岸道路から離れて起伏にとんだ丘陵や心地よいアップダウンのある里山を走るなど毎回違った趣向を取り入れ人気企画となった。

写真 6



④ <霞ヶ浦 1 周フィットネスサイクリング 90km>

1 人で霞ヶ浦を 1 周する自信のないビギナーと、いっしょに楽しく走りたいサイクリストを対象に募集したところ、意外にも後者の方が多く集まった。そのため、ただ湖岸を走るだけでなく、毎回違った趣向を凝らし人気企画となり計 13 回実施した。

しかし、回を重ねるうちに、パンクを起こして全員が足止めされたり、集団のスピードに付いて行けずに皆を待たせたりするケースも見受けられるようになった。ふつうの集団走行であれば、他の参加者に迷惑をかけたと気おくれしたり、次の参加を見合わせたりする人もいるだろう。しかし、私ども HMB アウトドアクラブでは、「サイクリングはあくまでも遊びであり今日は休日なのだ」という精神を表す “It’s a holiday!” を合言葉に、ハプニングもすべて含めて休日の遊びのすばらしい思い出とする精神で、参加者が決して罪悪感を持たずに何度でも参加できるような雰囲気づくりをしてきた。その甲斐あって、誰かがパンクするたびに全員がその参加者を囲んで記念撮影をするなど、考えられない光景が見られるようになった。中でも一番全員が盛り

上がったのは、会長自身がパンクを起こした回である(写真7)。

写真7



くれる方も現れるようになった。特に、農家の方が自宅に招き入れ甘酒やバナナを振る舞ってくださったり、収穫体験をさせてくださったり(写真8)、忘れられない回となることもしばしばであった。

また、このような会長のフレンドリーな性格も手伝って、回を重ねるごとにコース沿いで出会う人々と徐々に顔見知りとなり、そのうち自ら協力して

写真8



4. 考察

約1400名もの参加者を呼び込むことができたのは霞ヶ浦とその周辺地域の自然環境が無数の可能性を秘めているからに他ならないであろう。一方、ビギナーが個人でサイクリングしようとしても、トイレが少なく、パンクなどの急なハプニングや突然の悪天候などに対応できる施設やサービスがなく、また、補給食を購入できる店も限られていることから、非常に困ったという話をよく聞く。さらに、回遊性を持たせるための船やバスについても宣伝不足のためかあまり認知されておらず、利用者が少ないという皮肉な結果が生じている。

したがって、たとえば霞ヶ浦の湖岸10~20kmおきにトイレと、現在地や救急時の連絡先、最寄りの交通機関などを記したインフォメーションボードを立てるなどが急務となるであろう。トイレを造ることが難しければ、近隣の店に協力を仰ぎ、トイレを貸してもらえる店として経路や距離をボードに記載することもできるであろう。

次に今後のサイクリングイベントの展望について、まず<サイクル&クルーズ>については、個人による継続的な実施は難しいと考えている。前述のとおり、チャーター代10万円を賄うには100名近い参加者がいて初めて1人あたり1000円ほどの負担で済むわけであるが、参加者が100名集まっても、実際に船に自転車を持ち込んで乗れるのは40名程度が限界である。そこで私たちは走れる参加者には船に乗らず自走で潮来まで走ってもらい、その問題を何とか解決してきた。ここ数年茨城県や土浦市の社会実証実験でサイクルクルーズの運営が

始まったが、これも予算が下りなくなれば終了してしまうであろう。週末には自転車を載せられる小型のサイクルバスが常に霞ヶ浦を時計回りに周回するなど、画期的な対策が望まれるのではないかと。

<くるっと霞ヶ浦>について、このイベントは今後もっとも発展していく可能性を持つイベントだと考えている。現在は個人のできる範囲で行っているが、福島の「檜原湖1周ファミリーサイクリング」のように地元の商工会や婦人会を巻き込んで10kmおきにおやつや飲み物を提供するエイドステーションを作り、「あと半分だよ。がんばってね!」などの一言がもらえるだけでも、参加者にとって忘れられない体験となるはずである。特にファミリーで参加することによって、子どもたちが次に親となり、自分が味わった感動を子どもに味わわせたいと願うことで、継続可能なイベントとなっていく。プロやタレントを呼んでサイクリング振興を図るよりはるかに地域の観光にも寄与する継続可能で持続性の高い振興策となるのではなかろうか。

成人ビギナー対象のイベント<霞ヶ浦1周フィットネスサイクリング90km>や<スーパーチャレンジ霞ヶ浦130km>は、今後も人気イベントとして年間を通してできるだけ開催し、需要に応えたいと考えている。ただ、個人では広報に限界があるため、サイクリングや霞ヶ浦に関する情報を一括して探すことのできるサイトなどの設営が望まれる。また、スピードが増せば増すほど、ちょっとした路面の傷が命取りになる。未舗装区間の完成とともに、劣化した個所の修理が急務であると考えている。

5. 結論

サイクリングにとって母なる湖、霞ヶ浦の可能性は無限である。しかし、それを生かすのも殺すのもマンパワーに他ならない。私どものような個人や協会がサイクリングイベントを実践している集団を取りまとめ、ネット媒体だけでなく紙媒体、テレビ、ラジオなど様々な媒体を使って広報していくことで、必要な情報が必要な人に届き、霞ヶ浦や茨城県がますます「サイクリング天国」として認知され、魅力が高まるのではないだろうか。今後の茨城県の施策にさらに注目するとともに、微力ながら、私どもにできることを可能な限り実践し、霞ヶ浦や茨城県の魅力度アップに貢献していくことができればうれしい。